

現代に女子校は必要か？-ジェンダー・フリー教育の実現に向けて-

法学部政治学科4年

奥島ひかる

0. 目次

I はじめに

II 現状の分析

(1)女子校中等教育の先駆け

(2)女子中等教育の制度化

(3)戦後の女子校教育

III 女子校・共学論争と現代の女子校

(1)イギリスの男女別学論争

(2)隠れたカリキュラムの指摘

IV 現代の女子中等教育の特徴

(1)ジェンダー・トラックからの視点

(2)教育方針の分析・比較

V 女子校は現代に必要か？（まとめ）

(1)結論

(2)本研究の限界と今後の展望

I はじめに

男女別学校は、戦前からの「良妻賢母」教育のイメージがあっただけでなく、男女の不平等の象徴として批判されることが多い。しかし、共学化によって日本の男女平等は進んだだろうか？世界経済フォーラムによる 2018 年のジェンダーギャップランキングで日本は 149 カ国中 110 位(上位ほどジェンダーギャップが小さい)であった。その内訳は、経済分野で 117 位、教育分野 65 位、健康分野で 41 位、政治分野 125 位というものであり、教育においては比較的上位にいるものいわゆる「社会人」になってからの分野である政治と経済の分野でかなり下位に位置している。「共学化」を進めたからといって必ずしも男女平等が自動的に達成されるわけでないことは明白である。¹

むしろ、共学化が進む大きな理由は学校の経営上の事情であると考えられる。2008 年までの文部科学省による学校基本調査を参照すると、1975 年をピークに男女別学校は年々減少し、ピーク時の 2 分の 1 以下にまで減っている²。ここで改めて問われなければならないのは「共学化=男女平等」なのか、という問いである。1996 年の男女共同参画審議会答申における「男女参画ビジョン」では、「女性と男性が、社会的に形成された性別(=ジェンダー)に縛られず、各人の個性に基づいて共同参画する社会の実現を目指す」ことが明記された³。このようにジェンダーステレオタイプによって制約を受けない、解放されているという意味でのジェンダー・フリー教育は、共学化したというだけ達成されるのだろうか。

そこで筆者は、女子教育を戦前から担ってきた「女子校」に注目することでその解決策を得たい。男女共学が当たり前になった現代においてむしろ特殊になった女子校が、ジェンダー・フリー教育について示唆してくれることがあるのではないだろうか。

II 女子校形成の課程

(1) 女子教育の先駆け

明治 5 年、学制の発布により男女共に 8 年生の尋常小学校を必ず卒業すべき旨が定められた。公に女子に教育は認められたのは初めてのことであったが、この背景にあったのは必ずしも男女平等という観点からのものではなかった。もちろん、文明国家に肩を並べるにあたって「外国の女性に比べ日本の女性の地位があまりに低い」という指摘がなされたのも事実であったが、一番大きかったのが「よい妻、母となるためには教育が必要である。」という主張である⁴。このような目的を本音に、日本の女子教育は公なものとなった。

年を同じくして、官立東京女学校が、事実上初めての官立の女子中等教育機関として設立

¹ 内閣府『共同参画』no.119,2019

² 文部科学省『学校基本調査』2008

³ 総理府 男女共同参画審議会 『男女参画共働ビジョン-21 世紀の新たな価値の創造-』1996

⁴ 深谷昌志 『良妻賢母主義の教育』1990、黎明書房、pp43-46

された。⁵

これらの公の動きに先駆けて女子中等教育を行っていたのが、キリスト教宣教師たちである。その裏には日本の女子教育の遅れに対する純粋な嘆きの他、女子に対する布教を進めたいという意図もあったとされる⁶がいずれにせよ、彼らの動きは政府やのちにできる日本人による女子校設立よりも早かった。明治3年、米国人宣教師によってのちの女子学院となる私塾が設立された⁷のを皮切りに、フェリス女学院、横浜共立学園、雙葉中学・高等学校の前身となった私塾が、外国人居留地を中心に設立されていった。これらの私塾の教育目標としては、「女子教育」と「伝道者/教育者の育成」があげられ、実際多くの優秀な英語教師を輩出していた。

これらのミッションスクールは奨学金制度も充実し、表向きはどの階層に門戸を広く開いていた。しかし実際にはごく一部の中流・上層階級のための学校と化してしまっていた。このことは、キリスト教が、当時の知識層階級が是が非でも吸収したがった西欧的精神の根幹とみなされていたことに関係する。よってキリスト教系のミッションスクールは、これらの階級から絶大な支持を得て、彼らの利用するところとなっていた。そしてまたミッションスクールも、国家主義体制のなかで、日本社会への同化を迫られていくことになる⁸。

日本人経営の女子私学の設立は少々遅れをとり、明治8年、跡見学校が跡見花蹊によって設立された。両家の子女向けに、「女性の美德や品格、人生をよりよく生きるための知恵、学問や芸術を学ぶ姿勢、そして将来妻や母になった時の心得」を授けることが教育目標とされた⁹。開校時のカリキュラムも、「国語、漢籍、算術、習字、絵画、裁縫、琴、插花、点茶」¹⁰の九科目と、「良家のお嬢様」に向けたものだったことがうかがわれる。

後続の日本人による女子校の教育理念も時代背景を色濃く映していることがうかがえる。明治21年設立の東京女学館は、「日本の婦人に、欧米の婦人と同等の教育、および家事全般の訓練を受けさせること」を目的としていた。欧米列強と渡り合う中で、「欧米婦人と対等に交際できる日本婦人を育成するために、国際基準の女子教育を受けさせた

⁵ 文部省 『学制百年史』1981、帝国地方行政学会、第1編3節-3

⁶ 碓井知鶴子「明治のキリスト教女子教育の定着過程－明治20年代を中心に－」1969、『東海学園大 学紀要6』、p34

⁷ 女子学院中学校・高等学校公式サイト

<http://www.joshigakuin.ed.jp/school/deveropment/>（最終アクセス日 2019/12/30）

⁸ 同書、pp34-36

⁹ 学校法人跡見学園 HP <http://www.atomi.ac.jp/progress/>（最終アクセス日 2019/12/30）

¹⁰ 植田 恭代「『跡見花蹊日記』からみるカリキュラム--落合直文との関わりにふれて」2008、『跡見学園女子大学文学部紀要（41）』、pp1-17

い。」との思いの上に設立されたという¹¹。一方で、共立女子職業学校のように女性の自立を謳う学校も設立された。「共立女子職業学校設立の趣旨」によれば、日本の女性の「世を渡る有様」について、ほとんどの女性は自らは職業に活を父兄や夫に頼っている、だから、頼る父兄や夫がいなくなったら、女性の生活は悲惨なものになってしまう、と述べている。この現状認識は、当時にとっては先進的なものであったといえよう。このため、「術科」と呼ばれる実用的な技能が教えられたが、これは「女子に適する職業」が選ばれていて、科目は裁縫・刺繍・編物・造花などであった¹²。

以上に見たように、日本人たちによる女子校設立も、当時の時代の要請に従わざるを得なかったとみていいだろう。

(2)女子中等教育の制度化

学制から27年後の明治32年『高等女学校令』が發布され、女子への中等教育が公に初めて法的に施されることとなった。この法律の生みの親、樺山資紀の主張は「中流社会は男子のみでつくり上げることができないから、高等女学校を作り、温良貞淑な中流以上向きの才女を育成したい」、というものであった。¹³さらに高等女学校の浸透に尽力した文部大臣であった菊池大麓は「日本で女子というものは妻になり母になるものであるということは当然の成り行きであり、だからと言って女子が男子より地位が低いというわけではないが、女子が男子の領域に進むことは好ましくない。したがって、一流の主婦となって良妻賢母たる、この天職を満たすために必要な教育を女子高等学校は授けるのだ。」という趣旨の主張で、結果的には、女子への中等教育の普及に大きく貢献した。¹⁴この『高等女学校令』は、明治以降の女子教育に影響を与えてきた「良妻賢母」への社会からの要請を、はっきりと宣言するものになったといえるだろう。

この法律の裏で、『訓令12号』がだされ、宗教学校は正規の学校と認められず、各種学校という扱いとされることとなった。増え続けていたミッション系女学校に対する排斥の狙いがあったこの法律により、これまで女子教育をリードしてきたミッションスクールも『高等女学校令』に則り、「良妻賢母」を育成するように方向転換を迫られた¹⁵。

このように、戦前の女子校というのは女子への教育を与えながらも、あくまで「良妻賢母」を育成する目的で設立されたものであった。女子教育への門戸は女性の要請によりと言う

¹¹ 東京女学館 HP <https://www.tjk.jp/mh/archives/index.html> (最終アクセス日 2019/12/30)

¹² 阿部 恒久 「共立女子学園の歴史についての覚書」、2018、『共立国際研究：共立女子大学国際学部紀要 vol.35』 pp1-pp20

¹³ 片山清一 『近代日本の女子教育』 1984、建帛社、pp116

¹⁴ 同書、pp155

¹⁵ 同上、pp191-193

よりは、その時の政治家たちが政局に合わせて導入していった「上から」与えられたものに過ぎなかった。独自に女性教育への道を開いてきたミッション系の私学女子校も、やがてそれに迎合するように強いられていったのだ。

つまり、「良妻賢母」教育は女子校という特性から生まれたというよりは、時代の要請により強いられてきたものであるといえる。女子校がその時代の特性上それにあらがうことができなかつたということである。さて、それにもかかわらず女子校教育は否定され、時代は戦後、男女共学時代へと突入する。

(3)戦後教育

戦後も、1989年の学習指導要領の改正まで、教育現場で「良妻賢母」の育成を目指す思想は一定の影響を持った。もっともそれを顕著に表すのは家庭科と体育のカリキュラムに見られる。中学、高校の学習指導要領では「格技は主として男子必修、ダンスは主として女子必修」という決まりがあり、高校のそれには「男子の体育実技は11単位、女子は7単位」という決まりがあった¹⁶。

戦後教育においては主に経済界が「良妻賢母」を求めていた。1952年の中央教育審議会の報告の中からは女性が「家庭の担い手」と「流動的な労働力として」求められていることが、家庭の要性の繰り返しの協調・女性が保育に向いているという主張が繰り返されていることから読み取れる。この「戦後的特性論」に基づいて女子の特性に配慮した教育上の差別が正当化されていたのだ¹⁷。

この風潮は短大へのニーズの高さにも見ることができる。女子が高等教育を受けるのは「教養」によって結婚市場においてのアドバンテージをつけるためであり、4年では長すぎるとするのが支配的な考えであった。1960年代以降に設立された女子私立大も文学部・家政学部偏っていて、自然科学・社会科学部はほとんどなかった¹⁸。

「良妻賢母」思想を根底に据えながらも、1970年までには高校進学率における男女差はほとんどなくなり、70年代には逆転すらした¹⁹。そして1985年の女性差別撤廃条約の批准をきっかけに、家庭科と体育についてのカリキュラムが性差別ではないのかという議論が起こった。1989年に「武道・ダンスの領域については男女とも選択して履修できる」、「全日制普通科のすべての生徒に履修させる単位数は、9単位をくだらないこととする」と体育についての改正と、家庭科の男女必修化が行われた²⁰。

¹⁶ 横山文乃 「家庭科教育政策の変遷」 1996、『本郷法政要紀 no.5』、p290

¹⁷ 鶴田敦子 「「男女共学」から「男女平等教育へ」」、1998、『教育学研究鶴』、pp317

¹⁸ 同上、pp318

¹⁹ 内閣府男女共同参画局 『男女共同参画白書(概要版) 平成29年度版』

²⁰ ¹⁶ 同書、p305

III 日本と世界の女子校・共学論争

上記の変遷を得て形式上「男女平等」が達成された現代において、良妻賢母のイメージを残した女子校への風当たりは厳しいものである。実際、「男らしさ、女らしさ」を育成すべく教育方針を基層とする別学教育は、性別役割分業意識を強化しているという調査結果に基づき、この結果に基づき、男女共同参画社会の達成には、中等教育の共学化が必須だと主張する研究も存在する²¹。このような主張は現代の中等教育共学化を推し進める上で主流になっている意見とも言える。単純に共学化が「男女平等」につながっているのかについては再検討がなされなくてはならない。

(1) イギリスの男女別学論争

イギリスの男女別学論争は、まさに前述のような再検討の中で起こった例と言える。イギリスの女子校は19世紀から、日本とは対照的に、フェミニストたちの手によって勝ち取られてきた。20世紀に入るところにはフェミニズム運動の流れに乗って、カリキュラムの「男子校化」がすすみ、学力主義、進学主義がカリキュラムの中心に置かれていた。

しかし1920年代、不況による失業率の上昇などの影響で女性の社会進出が嫌悪の対象となると、これらの女子校は批判の対象になる。女子校は女子の「特性」を差別しているという特性論に基づいたものであった。さらに財政難があつて男子校と女子校の統合、共学化が進んだ。それに加えて「男女の性的融和」によって「新しい社会」をつくろうとする性科学における潮流の変化があつて、「異性愛を促進せず」、「同性愛すら誘発する」女子校はますます批判された²²。

実際に男女共学がイギリスで普及するのは1970年代であつたが、ここでは教育学者のレジナルド・デールによって別学は「調和と統一性を欠いた明らかに不自然な設定」であると批判された。そして、男子生徒は女子生徒の尊敬を集めたいため学力面で奮闘し、女子生徒は男子生徒を意識して女らしくふるまうという点が「共学の長所」としてあげられた。

²³

一方で、性差別撤廃法が成立したのと同じ1975年、教育科学賞によって中等学校についてある調査の結果が発表された。そこには、女子校の女子生徒のほうが共学校の女子生徒よりも理系科目を選択する傾向が強く、男子校の方が共学校より、男子生徒が文型科目を選択する傾向が強くなる、というものだった。さらに、共学校の女子生徒の示す理系科目での成績不振は極めて顕著であつた。この報告をきっかけに女子にもっと理科・技術科を、という目的のGIST(Girls into science and technology)プロジェクトが始動した。この中で行わ

²¹ 羽田貴史 武藤八恵子 「高等学校男女共学に対する意識調査 第二報」1992、『福島大学教育実践研究紀要第22号』

²² 堀内真由美 「男女共学生は進歩の砦？」2008、『ジェンダーで考える教育の現在』部落解放出版社、pp27-28

²³ 同上、p28

れた科学技術実験の「女子別編成」のなかで、共学校における、後述する「かくれたカリキュラム」の存在が指摘された²⁴。

これによって80年代に入って再び女子校への支持は高まった。女子校は現代においては「特性」に左右されない進路指導・職業選択を奨励し、女子生徒同士の連帯感や自立心を醸成することから、「フェミニズムをはぐくむ場」として支持されている。一方で女子校は階級差を顕著にするものであるという批判もあり、これには一定の理解が示されている。

(2) 「かくれたカリキュラム」への指摘

女子校への批判・支持意見には以上のものがあつたが、共学の教育に着目した問題点を探るなかでキーワードとなるのがこの「かくれたカリキュラム」である。

「かくれたカリキュラム」とは、「教育する側が意図する、しないに関わらず、学校生活を営むなかで、児童生徒自らが学びとっていく全ての事柄」を指す。それは、教室での生徒と教師の関係や、教室の雰囲気、係活動の割り振り、学校組織の運営の仕方など、学校生活のあらゆるところで見られる。「かくれたカリキュラム」の中では誰もが性差別を意識的に行っているわけではなく、「文化的、社会的」な通念が無意識のうちに再生産されてしまうというメカニズムを取る。このかくれたカリキュラムへの指摘は、徐々に影響力を持ち始めている²⁵。

学校組織の運営については、例えば、ある国立大学教育学部の附属中学校について、氏原(1996)の研究では、公務で部長、副部長についている教員の割合は、男性は二人に一人、女性は五人に一人という割合の違いがみられる。部長・副部長の男女比は6:1と圧倒的に男性教師が多い。²⁶公務で女性が中心的な役割を果たすことができないというメッセージを与えてしまうことになる。

また、教員の数自体も、高等教育に進むにつれ男女比において女性が顕著に少なくなっていく。平成30年度においては、幼稚園で約94%、小学校で約63%、中学校で約43%、高校で32%、大学で約24%である²⁷。

学校文化の中にもこの傾向はみられ、実際、ピア・グループ内での地位獲得が、思春期の女子においてはアカデミックな能力よりも重視されているという。具体的には男子は運動部員、女子はチアリーディング部の部員であることが重要となる。男子は競争意欲や野心が、女子は笑顔や魅力が奨励されているということであり、伝統的な「男らしさ」「女らしさ」

²⁴ ²² 同書、pp32-35

²⁵ 村松泰子 「学校教育とジェンダー：研究の実践と動向」2003、『学術の動向 8(4)』, 36-40

²⁶ 氏原 洋子 「中学校における男女平等と性差別の錯綜」1996、『教育社会学研究第58集』pp35-36

²⁷ 文部科学省 『学校基本調査』2018

の特質と同質であることが指摘されている²⁸。

そして、この「隠れたカリキュラム」が一番指摘されているのは教室においてである。大阪府のある市内の小学校14校、中学校4校の児童・生徒へのアンケートによれば、「先生は女子に甘い」と感じる生徒が男子の68.9%、女子の46.2%であるのに対し、「先生は男子に甘い」と感じている生徒は男子で3.6%、女子の6.6%にとどまった²⁹。教師の働きかけにジェンダーバイアスがあることを生徒は感じ取っているということとなる。実際、教師は女子を「繊細である」と認識して、叱責しないといった行動をとることがある。

教室内の男女差は授業中の行動にも見ることができる。観察によって、教師一生徒間の相互作用は男子の方が圧倒的に多いことが分かった。これは、教師の男女にかかわらず見られた。授業とは無関係な発言においても、男子の方が圧倒的に発言量が多かった。一方で、休み時間や給食の時間にはそのような傾向はみられず、男女が関係なく活発に発話していた。また、授業中での少人数の活動においても、女子は積極的に発話しリーダーシップをとる様子がうかがえた。つまり、女子は大人数の中で女子は「目立つ」ことを避けるという様子が明らかになった。これは教師の行動によるもの、というよりは、生徒自らの行動によるものである。教師はむしろ授業中において男女を平等に発言させようと努めており、挙手を求めた際は数少ない女子の手を見逃さないよう心掛けているという。むしろ生徒が、男子は一貫して自己主張をとまなう言動を行い、女子は目立たないような態度を取り、集団の行動様式を決めてしまっているようだ。J.トンプソンは、教師は教室の統率能力を絶えず測られていて、男子が女子よりも騒がしく問題行動を起こす傾向にある場合、教師は男子の方に注意を向けなだめ続ける、と説明する。また、そのような教室内の混乱に巻き込まれるのを防ぐため女子は沈黙を守り続けることになるという。つまり、教師と子ども集団の相互関係の中で、男女間の発言量や相互作用の量が違ってきてしまっているのだ³⁰。

「男らしさ」「女らしさ」の形成も教室の中で起こっている。例えば国語の授業においては、男子集団は素朴でコミカルな詩を書いた男子に対しては熱烈な賞賛を、リリカルな詩を書いた男子に対しては猛烈な攻撃を与えた³¹。さらに、4・5年生ころから同性の集団同士で自分たちの文化を確立させる一方、異性の集団に対しては分離、反抗を見せるようになる。教師に男女ができる限り混ざって座るように強制されない限り、男女は別々に座る、グループ形成をするようになるほか、異性と遊んでいるとからかわれるようになる。

つまり、教師がいくら男女平等の努力をしても、生徒の集団がそれを無効にしてしまうこ

²⁸ William A. Corsaro, and Donna Eder “Children’s Peer Culture”, 1990, Annual Review of Sociology, vol16, pp197-220

²⁹ 木村涼子 「教室におけるジェンダーの形成」1999、『ジェンダーと教育』日本図書センター、pp186-187

³⁰ 同上、pp189-191

³¹ 同上、pp192-194

とが明らかとなった。学校の構造の中で再生産されたジェンダーが、生徒同士のやり取りの中に再生産され³²、強化されるという現象が起きているといえるだろう。

このことはイギリスにおいても理系科目における実践を通して指摘されている。イギリスの女子にもっと理科・技術科を、という目的で行われた GIST(Girls into science and technology)というプログラムの中で実施された「女子別編成」の中で、理科実験や技術科実習を女子生徒だけに行わせた。この中で自発的に発言する、わからない点を躊躇せず質問する、作業に対する姿勢が積極的である、などと男女混合で同じことをしているときの女子生徒とは全く異なる行動を見せた。³³

この結果を受けて普段の授業に対してプロジェクトチームが観察を繰り返し行った。すると、「理科の授業で、女子生徒の発言はしばしばだし生徒たちから遮られたり、からかわれたりした。」「実験では、女子が器具の準備や記録係をする一方、実験を中心的に行ったのは男子だった」といった発見がされた³⁴。同様の指摘は村松(2004)他の研究者³⁵によって、日本でも指摘されている。さらに、教師たちは男子が教室の空気を支配することを自明にとらえ、むしろ助長した。「勢い」のある男子生徒の言動に応答する一方で、女子生徒への応答を後回しにしていたことも観察から明らかにされている。

これらの隠れたカリキュラムに対する指摘は、共学校には伝統的なジェンダー観が再生産されていることが多く、その影響から逃れられていないことを示している。「共学化」のみで男女平等が達成されるわけではないことが明らかになった。では、「女子校」という社会では再現し得ない特殊な構造を持った学校に注目したとき、このことに対してどのような考察が得られているのだろうか。

IV現代の女子中等教育

(1)ジェンダー・トラックからの視点

日本の女子高校は現在、「良妻賢母型」「エリート型」、その折衷の「女性性利用型」といった志向性に分けることができるという研究³⁶にも見る通り、従来言われてきた「良妻賢母」のほかにも多岐にわたる理念を掲げている。

中西の研究によれば、ある2校の私立女子校について比較したとき、入学時の偏差値は6

³² 亀田温子 『学校をジェンダーフリーに』2000、明石書店、p25

³³ Barbara Smail “An attempt to move mountains: The Girls into Science and Technology project”, 1985, Journal of Curriculum Studies,p351

³⁴ 同上、p353

³⁵ 村松泰子 「理科好きな女子、男子を増やすために」2004、『理科離れしているのは誰かー全国中学生調査のジェンダー分析』日本評論社、第5章

³⁶ 今田絵里香 「女子高校における女性性利用型成功志向」2008、『ジェンダーで考える教育の現在』、部落解放出版社、pp83-86

7, 62 とほぼ変わらなくても、一方は学校組織上の特徴を「良妻賢母・教養夫人の養成」にもち、もう一方は「専門職・キャリア女性の養成」にもつことがある。そして、その違いは生徒の進路展望にも影響を及ぼしており、「良妻賢母」教育を行っている高校の生徒は職業継続においては①結婚・出産退職を希望する生徒は25.4%、②中断再就職を望む生徒は48.5%、③定年まで継続することを望む生徒は26.1%であった一方で、「キャリア女性」教育を行っている高校では①8.1%、②39.7%、③52.2%という大きな差がみられる。現在の女子高校は「専門職・キャリア女性の養成」と「良妻賢母・教養夫人の養成」という2つの軸のどちらかによって分布している特徴がみられるという³⁷。

進路決定に少なからずかわる学校組織がこれまで「学力水準」によって、いわゆる偏差値ランキングのような「層」=トラッキングを形成し、生徒の進路を差異化してきたことがこれまで指摘されてきた。内面化された「性別役割」も同じように学校においてトラッキングを形成していると指摘するのが「ジェンダー・トラック」という構造である³⁸。

「良妻賢母養成」と「エリート養成校」の2校の女子校を比較したとき、実際にそのような進路選択をする傾向がみられたことは前述したが、ここでそのような生徒がそもそも入学するから当然ではないかという指摘がなされるかもしれない。これについて中西は調査をもとに以下のように説明する。まず、出身家庭背景（特に母親の勤務形態）が学校の特性と一致する場合、特定の進路への規定力はきわめて強力になる。しかし、出身家庭の背景と学校の特性が一致しない場合、学校の特性に適合的な方へ進路の規定力は働く、したがって、もともとの過程の効果とは独立した学校の効果は確かに存在している、ということである。

これらの研究からわかるのは、生徒のジェンダー意識や進路選択には学校ごとの特色というものが影響を与えるということである。しかし、これまでの研究で指摘されている「良妻賢母型」と「エリート型」とその中間という構図だけで、現代の女子校をとらえきれているのだろうか？この見方だけでは、結局男女の二項対立に陥り、ジェンダーフリー教育をとらえるには不十分なのではないか。そこで、以下では首都圏の私立中学の教育方針・カリキュラムを分析・比較し、その傾向から女子校が「ジェンダー・フリー教育」に向けて提供できる価値とは何かを探る。

(2)教育方針の分析・比較

現代の女子校の特徴を明らかにするため、首都圏3都県(東京都・神奈川県・埼玉県)91校(『中学受験案内』旺文社掲載)の教育方針を分析、比較した。

まず本分析で明らかになったのは、「エリート養成型」と「良妻賢母型」の二項対立ではとらえきれない女子校の特徴だ。

最も多くみられた言葉は「個性」「人格」「人間性」を育むことに関連する言葉で、33校

³⁷ 中西祐子 『ジェンダー・トラック』1998、東洋館出版社、pp93-109

³⁸ 同上、pp17-32

で見られた。これらの学校は「エリート養成型」と「良妻賢母」のどちらにも分類されない、いわば「個性伸長型」であるといえる。

従来の「エリート養成型」を想起させる言葉としては、「学問」、「知性」、「学力」、「大学進学」等があり、合わせて31校という多くの学校で見られた。他にも「勤勉」、「努力」という言葉が5校で見られた。

ただ、学業にとどまらない分野での活躍を後押しする学校も多くみられ、「情操」、「豊かな心」、「感性」を育むとする学校が18校あった。「自由」、「自主性」を重んじるとする学校も17校とつづく。「創造力」、「広い視野」を育てるとする学校10校と比較的多く、勉強にとどまらない「学び」を提供しようとする姿勢がうかがえる。例えば神奈川県私立フェリス女学院の教育方針には「学問の尊重」、「誠の自由の追求」をモットーに、自由な校風のなかで、豊かな教養を身に着けた個性的な女性を育てる。」とある。フェリス女学院は一般的に入学偏差値が71³⁹、大学合格実績も高く評価されるいわゆる「進学校」に分類されるが、「エリートを育てる」というよりは自主性・主体性を尊重した教育を行っていることがうかがえる。

「良妻賢母」を想起させる言葉もいくつかの学校で見られ、「温順」、「温雅」、「家庭人」といった言葉が5校で見られた。「品性」、「愛」といった言葉も女子校に特有で、27校で使われている。「エリート養成型」と「個性伸長型」と並んで、やはり「良妻賢母型」の学校の存在も認められた。

次に明らかになったのは、女子校の現代社会の要請に応えようとする姿勢だ。「奉仕」、「社会貢献」、「人材育成」という言葉が28校と多くの学校で見られており、これは女子校の側から価値を提供するのでなく、時代に合った人物を輩出しようとする姿勢といえる。「女性の社会進出」というテーマに取り組む学校も多く、「起業家精神」を育てようとする学校や、「キャリア教育」を行うと記している学校は14校、「夢」、「志」、「自己実現」を目指す学校も7校見られた。例えば東京家政大学附属女子中学校においては「「ヴァンサンカン・プラン」で豊かな人間性と学力を育て、25歳の理想の自分を目指す。」とかなり具体的な教育方針を打ち出している。ここでは作文、職業研究に加えて、OBの講演会やインターンプログラムを取り入れることで徹底したキャリア教育を行っている⁴⁰。また、東京都の私立品川女学院でも「28歳になったときに社会で活躍している女性の育成を目指す」と具体的な目標を掲げている。ここでは六年間をかけて「地域」、「日本」、「社会」、「企業」を軸に様々なフィールドワークを行い、長期的な目線を養うプログラムを設けている⁴¹。

³⁹ 2018年度首都圏模試センター調べによる。2018年度中学受験案内(旺文社)pp581掲載。

⁴⁰ 東京家政大学附属女子中学校 HP <https://www.tokyo-kasei.ed.jp/senior/feature/vingtcinqans.html> (最終アクセス日:2019/01/28)

⁴¹ 品川女学院 HP http://www.shinagawajoshigakuin.jp/01guide/28_04.html (最終アク

また、「国際」、「グローバル」という言葉が28校と多くの学校で使われていて、これもグローバル化という時代の要請に応えようとする姿勢の表れだろう。「英語」「外国語」の強化を謳う学校は12校見られ、意識の高さを物語っている。さらに、「多様性」、「共生」、「生かし合う」といった言葉が13校で見られたが、これらの表現からは単なる英語力を超えた、「多文化共生」の社会に備える意図がうかがえる。例えば東京都にある私立玉川聖学院中等部の教育方針では、「聖書に基づいた人間理解によって、お互いを大切にし、生かし合う心を育てる。国内外の人々と出会う異文化体験が、偏見を乗り越えて世界をつなげる心を養う。」とあるが、この学校では実際に「総合学習」の時間で国際・人権・平和等のテーマを扱い、問題意識を育てる授業を行っている。高等科の授業では「総合人間科学」の時間として一年間かけて「生と死」に向き合う授業を展開するなど、知識的な面だけでなく、人とのつながりを通して答えのない問いに向き合う試みが行われている⁴²。

しかし、語学を推す学校に比べて従来女子が弱いと言われていたように言及した学校がわずかに1校であったことは、「女子は語学、男子は科学」というような特性論を克服しきれていないことを物語っており、今後の課題といえる。

表1：分析結果に見られた象徴的な言葉とその校数

| 象徴的な言葉 | 女子校 |
|--------------|-----|
| 個性・人格・人間性 | 33 |
| 国際・グローバル | 28 |
| 奉仕・社会貢献・人材育成 | 28 |
| 情操・豊かな心・感性 | 18 |
| 自由・自主性 | 17 |
| 知性・学問 | 16 |
| 学力・大学進学 | 15 |
| 愛 | 15 |
| キャリア教育 | 14 |
| 多様性・共生 | 13 |
| 英語・外国語 | 12 |
| 品性 | 12 |
| 勤勉・努力 | 10 |
| 創造力・広い視野 | 10 |

セス日：2019/01/28)

⁴² 玉川聖学院中等部・高等部 HP <https://www.tamasei.ed.jp/schoollife/sixyear.html>

(最終アクセス日 2019/01/28)

| | |
|---------------|----|
| 思いやり・感謝 | 10 |
| 自立・独立 | 9 |
| たくましさ・強さ・質実剛健 | 8 |
| 自己実現・夢・志 | 7 |
| 礼・マナー | 6 |
| 聡明 | 6 |
| 規律・責任・協調 | 5 |
| 健康 | 5 |
| 自律 | 5 |
| 温雅・温順・家庭人 | 5 |
| リーダー | 2 |
| 科学 | 1 |

次に、男子校・共学校と比較した際の女子校の特徴について考察する。首都圏3都県の男子校43校、共学校131校について、前述同様の調査を行った。

まず、三者で上位に並んだ言葉を見てみる。女子校では①個性/人格/人間形成、②国際/グローバル、③奉仕/社会貢献/人材育成、④情操教育/豊かな心/感性、⑤自由・自主、の順で、特に国際/グローバル、奉仕/社会貢献/人材育成の項目では他の二者を卓越していた。

男子校では①個性/人格/人間形成、②奉仕/社会貢献/人材育成、③学力/大学進学、④情操教育/豊かな心/感性、⑤自由・自主、と学力や大学進学の項目で、女子校との違いが見られた。

共学校では、①個性/人格/人間形成、②国際/グローバル、③学力/大学進学、④情操教育/豊かな心/感性、⑤創造力/広い視野、と同じく学力や大学進学の項目の他、創造力/広い視野の項目で違いが見られた。

以上の比較からは、まず、三者にそれほど大きな差異がないことが分かる。女子校だからと言ってステレオタイプ的な言葉が並ぶわけでもなく、よってどこかの分野で劣るということはないといえるだろう。しかし、一方で差異に注目すると女子校においては学力や大学進学が比較的推しだされていないことがうかがえる。では、女子校が大学進学に消極的かというところではなく、代わりに「キャリア教育」を打ち出している学校が14校と、2校の男子校や7校の共学校に比べ卓越して多い。これは、女子校が大学進学だけにとどまらない、その先の進路までをサポートしていることを示しており、現代の女子校の特性といえる。

上位にはないものの、多様性や共生を打ち出した女子校も、両者に比べて割合が高く、女子校で13校あるのに対し、男子校で3校、共学校では13校だった。国際/グローバルの多さと合わせ、女子校が多様化する社会のトレンドに敏感であることがうかがえる。「品性」、「愛」といった単語の割合の高さは、「良妻賢母型」の学校の存在を際立たせている。一方

で「独立・自立」を盛り込んだ学校の割合が高いこと、前述の「キャリア教育」に言及した学校が突出していたこともまた、女子校ならではの特徴といえる。

女子校には使われなかった言葉としては、「文武両道」が男子校・共学校合わせて9校で使われているのに対し、女子校では0校であった。いまだにスポーツに積極的な女子校、というのは少ないようだ。また、「リーダー」を育成するという文言も女子校ではわずかに2校で、男子校の2校、共学校の18校と比べると割合において劣っている。この点も、今後の課題点として指摘されるべきだろう。

表2：分析結果に見られた象徴的な言葉（女子校・男子校・共学）

| 象徴的な言葉 | 女子校 | 男子校 | 共学校 |
|---------------|-----|-----|-----|
| 国際・グローバル | 28 | 8 | 45 |
| 英語・外国語 | 12 | 3 | 16 |
| 多様性・共生 | 13 | 3 | 13 |
| 知性・学問 | 16 | 6 | 17 |
| 勤勉・努力 | 10 | 5 | 9 |
| 学力・大学進学 | 15 | 13 | 33 |
| 情操・豊かな心・感性 | 18 | 10 | 25 |
| 創造力・広い視野 | 10 | 10 | 21 |
| 自己実現・夢・志 | 7 | 4 | 10 |
| 個性・人格・人間性 | 33 | 25 | 75 |
| 自由・自主性 | 17 | 10 | 20 |
| 奉仕・社会貢献・人材育成 | 28 | 13 | 19 |
| 規律・責任・協調 | 5 | 4 | 12 |
| キャリア教育 | 14 | 2 | 7 |
| リーダー | 2 | 2 | 18 |
| 健康 | 5 | 6 | 10 |
| たくましさ・強さ・質実剛健 | 8 | 5 | 14 |
| 自立・独立 | 9 | 1 | 8 |
| 自律 | 5 | 4 | 10 |
| 礼・マナー | 6 | 1 | 7 |
| 愛 | 15 | 3 | 9 |
| 品性 | 12 | 1 | 5 |
| 思いやり・感謝 | 10 | | 8 |

| | | | |
|-----------|---|---|---|
| 温雅・温順・家庭人 | 5 | 3 | 1 |
| 聡明 | 6 | | |
| 科学 | 1 | 1 | 9 |
| 文武両道 | 0 | 5 | 4 |

V女子校は現代に必要なか？（まとめ）

まず、様々な先行文献から女子校について回る良妻賢母思想は、女子校という特質というよりは、戦前に女子教育を実現させるために「建前として」掲げられた思想であったということが確認された。

さらに戦後になって男女共学が実現されても、建前であった良妻賢母思想は産業界の要請から受け継がれる形となった。つまり、女子校に一貫していると思われる良妻賢母思想は、常に周りからの圧力によって残され続けたものであり、女子校教育そのものがそれを望んだというわけではないのである。

しかし、女子校はその思想のために男女共同参画社会の弊害とされた。そして共学化が全国的に進み、日本の教育は男女平等が達成されていると形式上はいわれるようになった。

しかし、ここで指摘されたのが共学校における「隠れたカリキュラム」の存在である。社会に根付いた伝統的なジェンダー観が、学校組織や教師とのやり取り、教育カリキュラムを通じて再生産されており、それが生徒同士のやり取りにまで影響をもたらしていることが指摘された。つまり、共学化だけではジェンダー・フリーな教育には至らなかったのである。

そのなかで女子校は従来の「良妻賢母型」にとどまらない、「エリート養成型」、「女性性利用型」など様々な女性を育てる学校へと変化を遂げていた。

そして、実際に教育方針から新たにみえた女子校の特質は、伝統的なジェンダー観とは正反対の特性を持つにとどまらず、「女性らしさか男性らしさか」という二項対立を超えた、「個性」や「心」を育もうとする「個性伸長型」の学校の存在も浮かび上がった。「社会」とりわけ「グローバル社会」が要請する人材育成への高い意識、女性のための「キャリア教育」を通じて社会進出をサポートする姿勢も、女子校の強みであると示された。

しかし、男女の特性論を完全に克服するには至っておらず、語学教育を推しだす学校に対して理数系の教育を推しだす学校は極端に少ない。リーダーを育むとする学校も未だ数が少ない点も課題として指摘された。

これらを踏まえると、現代において女子校は、選択肢の一つとして必要といえるだろう。グローバル社会の要請にいち早く応えようとする姿勢は、「良妻賢母教育」と批判され続けながらも生き残った女子校だからこそ、時代に敏感になることで身に着けられた強みであるといえる。また、「個性伸長型」の学校の存在は、「隠れたカリキュラム」の克服に非常に重要である。このような「男らしさ/女らしさ」の二項対立を超えた「個性」や「心」の教育は、「ジェンダー・フリー」教育のまさに完成形を示しているのではないだろうか。「エリ

ート養成型」、「良妻賢母型」も含め、多様な教育形態を持つ学校が現代日本にあることは前向きにとらえるべきことだ。

(2)本研究の限界、今後の展望

本研究の限界は「教育方針」のみに注目した点にある。あくまで方針は打ち立てられるもので、実際の状況を今後はインタビューや観察を通して考察する必要がある。

さらに、学校内での生活に限って見たため、男女が混じる社会に出てからの効果について言及ができていない。教育効果についての研究は難しいものの、彼女らのその後を追いかけることは、女子校研究の発展に大きく寄与すると考えられる。

参考文献、サイト

内閣府(2019)『共同参画』no.119

文部科学省(2008)『学校基本調査』

総理府男女共同参画審議会(1996) 『男女参画共働ビジョン-21世紀の新たな価値の創造-』

深谷昌志(1990) 『良妻賢母主義の教育』、黎明書房

文部省(1981) 『学制百年史』 帝国地方行政学会

碓井知鶴子(1969)「明治のキリスト教女子教育の定着過程－明治20年代を中心に－」『東海学園大学紀要6』、34頁

女子学院中学校・高等学校公式サイト <http://www.joshigakuin.ed.jp/school/development/> (最終アクセス日 2019/12/30)

学校法人跡見学園 HP <http://www.atomi.ac.jp/progress/> (最終アクセス日 2019/12/30)

植田 恭代(2008)『『跡見花蹊日記』からみるカリキュラム--落合直文との関わりにふれて』 『跡見学園女子大学文学部紀要(41)』、1-17頁

東京女学館 HP <https://www.tjk.jp/mh/archives/index.html> (最終アクセス日 2019/12/30)

阿部 恒久(2018)「共立女子学園の歴史についての覚書」『共立国際研究：共立女子大学国際学部紀要 vol.35』 1-20頁

片山清一(1984)『近代日本の女子教育』 建帛社

横山文乃(1996)「家庭科教育政策の変遷」『本郷法政要紀 no.5』、290-305頁

鶴田敦子(1998)『「男女共学」から「男女平等教育へ」』教育学研究鶴

内閣府男女共同参画局(2017) 『男女共同参画白書(概要版) 平成29年度版』

羽田貴史 武藤八恵子(1992) 『高等学校男女共学に対する意識調査 第二報』福島大学教育実践研究紀要第22号

堀内真由美(2008)「男女共学生は進歩の砦？」『ジェンダーで考える教育の現在』、部落解放出版社

村松泰子(2003)「学校教育とジェンダー：研究の実践と動向」『学術の動向 8(4)』、36-40頁

氏原 洋子 (1996)「中学校における男女平等と性差別の錯綜」『教育社会学研究第58集』、35-36頁

文部科学省(2018)『学校基本調査』

William A. Corsaro, and Donna Eder(1990) “Children’s Peer Culture”, Annual Review of Sociology, vol16, pp197-220

木村涼子(1999)「教室におけるジェンダーの形成」『ジェンダーと教育』日本図書センター

亀田温子(2000)『学校をジェンダーフリーに』明石書店
Barbara Smail(1985) “An attempt to move mountains: The Girls into Science and Technology project”, Journal of Curriculum Studies, pp351
村松泰子(2004) 「理科好きな女子、男子を増やすために」『理科離れしているのは誰かー全国中学生調査のジェンダー分析』日本評論社
今田絵里香(2008) 「女子高校における女性性利用型成功志向」『ジェンダーで考える教育の現在』部落解放出版社
中西祐子(1998)『ジェンダー・トラック』東洋館出版社
旺文社(2018)『2018年度中学受験案内』旺文社
東京家政大学附属女子中学校 HP <https://www.tokyo-kasei.ed.jp/senior/feature/vingtcinqans.html> (最終アクセス日：2019/01/28)
品川女学院 HP http://www.shinagawajoshigakuin.jp/01guide/28_04.html (最終アクセス日：2019/01/28)
玉川聖学院中等部・高等部 HP <https://www.tamasei.ed.jp/schoollife/sixyear.html> (最終アクセス日 2019/01/28)